

Title	景氣變動と日本資本主義の成立
Author(s)	谷口, 吉彦
Citation	經濟論叢 (1929), 29(5): 711-733
Issue Date	1929-11-01
URL	https://doi.org/10.14989/129813
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第 卷九十二第

行發日一月一十年四和昭

論叢

營業税に於ける累進課税

法學博士

神戸 正雄

平均生産力説について

文學博士

高田 保馬

我國に於ける生命保険業の首唱と先驅

文學博士

三浦 周行

經濟靜學と經濟動學

文學博士

米田庄太郎

說苑

北米合衆國の農業問題

經濟學士

八木芳之助

景氣變動と日本資本主義の成立

經濟學士

谷口 吉彦

明治政府の貸附金

經濟學士

吉川 秀造

雜錄

漁業についての一管見

法學博士

財部 靜治

徳川時代の商人カルテル

經濟學士

菅野和太郎

獨逸信用組合の近狀

經濟學士

楠見 一正

禁漁制度に就て

經濟學士

岡本 清造

新地租法案の税率

經濟學博士

沙見 三郎

近著外國經濟雜誌主要論題

景氣變動と日本資本主義の成立

谷 口 吉 彦

一 明治十四年以後のデフラチオン不景氣——

十七年の恐慌

(一) 吾々はさきに、我國最初の西南役後のインフラチオン景氣が、金融機關の飛躍的發展を齎らし、わが資本主義の發育に重要な一時期を劃したことを見た。¹⁾この小論は、その後に於ける景氣變動が、わが資本主義の發育成立の上に、如何なる役割を演じたかを見んとするものである。

明治十四年九月松方藏相の就任と共に、政府は幣制確立の新方針を決定し、紙幣償却、正貨蓄積、中央銀行の設立、兌換銀行券の發行と漸を追ふて着々實現を期することゝなつた。

第一に不換紙幣を償却するため斷然たる緊縮政策を採ることゝし、(一)十五年以後三ヶ年の歳出を据置として臨時の増額を一切許さず、(二)歳出入の順序を改正して一時立替のための豫備紙幣の發行を廢止し、(三)官業拂下げの方針をとり民業補助金及び貸附金を打ち切り、(四)地方財政への補助

1) 拙稿、景氣變動と日本資本主義の發生 (經濟論叢第二十九卷 第四號昭和四年十月)。

を打切る等、あらゆる方法によつて財政の緊縮を計り、通貨の收縮を促した。

第二に正貨蓄積の方法として、(一)政府の準備金を荷爲替に運用して、外國正貨を吸收し且つ輸出を促進すると共に、(二)正貨を以つてする對外支拂を節減し、且つ受入正貨を以つて之を支拂ふことゝなし、(三)準備金の運用方法を改正して正貨をこゝに蓄積することゝした。²⁾

かくして紙幣の償却と正貨の蓄積が其の緒に就くに從つて、日本銀行は翌十五年十月開業せられ、兌換銀行券は十八年五月初めて發行せられ、不換紙幣は十九年一月以降漸次に引換へらるゝことゝなつた。同時に國立諸銀行の發行する銀行紙幣に對しても亦、十六年條例を改正して二十ヶ年の營業期間に於て漸次に之を償却せしむることゝし、國立銀行は營業滿期と共に逐次私立銀行に轉換すべきものとなした。

かくの如くして政府紙幣も銀行紙幣も十四年以來漸次その流通高を縮少し、反對に正貨準備は次第に増加した。左に其の數字を示す。³⁾

年 末	通貨流通高(千圓)		正貨準備高(千圓)	準備歩合(%)
	政府紙幣	銀行紙幣		
明治十三年	一二四、九四〇	三四、四二六	一五九、三六六	七、一六六
同 十四年	一一八、九〇五	三四、三九六	一五三、三〇二	一二、六九九
同 十五年	一〇九、三六九	三四、三八五	一四三、七五四	一六、七三〇
同 十六年	九七、九九九	三四、二七五	一三二、二七五	二五、八七六
同 十七年	九三、三八〇	三一、〇一五	一二四、三九六	三三、五六九
同 十八年	八八、三四五	三〇、一五五	一一八、五〇〇	四二、二六五
		計		
				四、五
				八、三
				一一、六
				一九、六
				二七、〇
				三五、七

2) 松方正義、紙幣整理始末、一二二頁以下參照。

3) 松方正義、紙幣整理始末附録に據る。

(二) 然るに此の如きデフラチオンは必然に、一方には紙幣價值の回復を來すけれども、他方には物價及び米價の下落、金利の低落、公債の騰貴を招來することゝなつた。左に是等の數字を示す。

年次	銀貨一圓ニ對スル紙幣ノ價格	物價指數	米價	金價	金利	公債價格
	a)	b)	c)		d)	e)
明治十三年	一、四七七	一八一	一〇、八四		一、二八	七一、八五
同 十四年	一、六九六	二〇七	一一、二〇		一、三九	六九、五〇
同 十五年	一、五七一	一九七	八、九三		八五	七三、三八
同 十六年	一、二六四	一六四	六、二六		六五	八三、九五
同 十七年	一、〇八九	一四四	五、一四		一、〇三	九三、三九
同 十八年	一、〇五五	一五二	六、五三		一、〇七	九六、三三
同 十九年	一、〇〇〇	一三八	五、六〇		七八	一〇七、三五

此の如きは即ち不景氣の表徴に外ならぬ。東京經濟雜誌は既に早く十四年八月この不景氣を警戒して、『紙幣償却の説果して實事ならんには、國家のために祝すべしと雖も、商賈及び銀行者に於ては、最も戒心せざるべからざる者あり』となし、來るべき商業の沈滞は國家經濟上の大問題なりとして、『紙幣下落の時は勞役者損失し、紙幣騰貴の時には商賈の損失するものなり。情實より考ふれば、勞力社會の損失は憐むべしと雖も、社會の組織上より論すれば、商賈製造主の損失こそ憂ふべしと爲す。何となれば勞力者の損失は、之をして其の生計の度を減せしむるに止まると雖も、商賈若くは製造主の損失は、銀行に及び勞力者に及び廣く社會に凶難を發するものなればなり』と論じ、更に爲政者としてこの際採るべきは、『豫め人民をして何年より何年に至る

a) 前出。
 b) 紙幣整理始末附録、一萬圓以上貸附年利平均利子の年平均。
 c) 同上附録、金錄公債東京株式取引所相場。
 d) 同上東京經濟雜誌第七十三號(明治十四年八月十三日)八二一頁。
 e) 同上八二四頁。

まで若干の減少ありこの事を熟知せしむること、實に理事者の最も注意すべき處なり』⁶⁾と述べてゐる。

果して此の不景氣は十四年の後半すでに現れ來り、十五年十六年に於て次第に進行し、十七年に於て遂に恐慌状態を現出するに至つた。銀行の破綻はすでに十五年八月飯山第二十四銀行をきつかけに、十一月には大阪第百二十六銀行、十六年に入つては大阪第二十六、須賀川第百八銀行の閉店あり、東京第四十五、程ヶ谷第百三十二、松江第七十九銀行は何れも一時營業停止となつた。オリエンタル銀行の横濱支店も亦この恐慌に當つて閉店の餘儀なきに至つた。商工業にあつても亦、不景氣は十四年後半より十八年に亘り、さきにインフレーション時代に簇生した多數の小企業は、此の激動に會つて十六七年に亘り破綻倒産するもの續出するの悲況に陥つた。商業會社の資本額及び大阪に於ける手形交換高の減少は即ち此の不景氣を實證するものである。

年 次

商業會社資本(千圓)

手形交換高(千圓)

明治十五年	五一、〇〇〇	四六、四八七
同 十六年	三一、〇〇〇	三一、三八五
同 十七年	一七、〇〇〇	二二、六五六

『明治財政史』は當時の状態を次の如く報告してゐる。

『是より先き明治十三年九月、政府は紙幣銷却の議を決して、漸次政府の發行にかゝる不換紙幣の銷却を斷行することとなりたるを以て、十四年下半年に至りては其結果漸く市場に現はれ、政府紙幣の價格次第に回復し始め、數年來存りに昂騰したる物價は、先づ米價に於て下落の端を發し、忽ち諸物價に影響を及ぼし、農家は復た前日の餘裕を覺えず、商買は隨つて購入す

れば随つて損失を被るを以て、寧ろ手を束ねて時價の動靜を窺ひ、工業者も亦前途を憂ふるの有様となり、同年上半季まで、打續きたる經濟社會の上景氣は、遂に其蹟を斂めて忽ち商況不振の悲況を見るに至れり。……

『……物價の下落に基因する我經濟社會の激變は、明治十五年に至りて益々甚だしく、反動の波勢彌々力を増し、商況全く萎靡して金融殆んど沈靜し、農工の業大に衰退の色を現はし、銀行の營業亦頗る困難を覺えたり。即ち常に新に有利なる事業に向て投資の途を得る能はざるのみならず、對人信用に基く貸出は損失に歸するもの夥しく、地所家屋を抵當に取りたるもの如き、有價證券・商品の擔保を受けたるもの如き、一として損耗をなさざるなし。之を以つて各國立銀行は孰れも其經營に苦まざるものなく、就中平素基礎の鞏固ならざるものありては、其影響を受くること一層甚だしく、百方畫策して一時の危急を凌がんと欲し、其施設運用の當否を顧みるの遑なく、倒行逆振遂に收拾すべからざるに至り、遂に閉店の不運に陥り……其勢は翌十六年に至りて尙ほ止まず、我國經濟史上殆んど空前の慘狀を呈し、銀行の信用一時全く地に墜つるに及びたること後に述ぶる如し。』⁷⁾

『明治十六年……前年來打續きたる經濟界の不振は、物價の下落と共に波勢彌々強く、明治十八年末に至るまで不景氣の嘆聲は全國到る所に響き、商業は沈滯し、農工は萎靡し、爲めに經濟界は數年間荒廢の光景を呈したり。銀行たるもの此間に介在して獨り其繁榮を保つことを得んや、其國立たると將た私立たるとを問はず、齊しく警戒の裡に在りて放資の途に窮したるのみならず、既に貸出せる資金は概ね停滯して回收の望みなく、加之其抵當とせる地所家屋等の不動産は、價格非常に下落して營業上莫大の齟齬を生じ、多少の損失を蒙らざるもの殆んど稀なり云々』⁸⁾

(三) かくの如くして吾國最初のデフレチオン不況は、遂に金融界・商工界の恐慌にまで導かれたのであるが、此の外見上の不幸は、併し乍ら内面的には吾が資本主義の發展にとつて、避くべからざる緊要な過程であつた。即ち此の不況期に於て資本主義の基礎的準備は略々完成されたのである。政治的變革期の遺物たる不換紙幣は整理されて銀紙は平價に復し、國立諸銀行は中央銀

7) 明治財政史、第十三卷四四二—四四三頁。

8) 同上 四六五頁。

行に統一されて金融組織網を作り、兌換制度は確立されて幣制の安定を保證し、官業政策は放棄されて自由放任政策に轉換し、かくて後の時代に發展すべき經濟的準備は、略々此の時代に於て一應の完成を遂げたのであつた。

最後に明治十年——十八年に亘る吾が國民經濟の發展を反映する外國貿易を一瞥する。貿易總額の傾向は前の時代と大差なく此の期間に亘つてたゞ緩慢なる増加を示せるに過ぎない。之を十年以後の増加傾向と比較してその緩慢さは寧ろ意外とする程である。併し乍ら此の事實は即ち吾が國民經濟が此の時期に入つても尙ほ未だ十分なる活動期に入らざること、換言せば其の活動の基礎的準備に主力を傾注しつゝあることを傍證するものではなからうか？ 更に之を輸出入別に見る時は、輸出は全期間を通じて漸増傾向をとり、輸入は前半期に於て増加し、後半に於て却つて著しく減退したゝめ、前半には入超、後半に出超を示すに至つた。此の事實は即ち既に述べられるインフラチオンの好況とデフラチオンの不況を略々正確に反映するものである。

物品輸出入高表(千圓)⁹⁾

	貿易總額		差額
	輸 入	輸 出	
明治十一年	五八、八六二	三二、八七四	(入) 六、八八六
同 十二年	六一、一二八	三二、九五三	(入) 四、七七七
同 十三年	六五、〇二一	三六、六二六	(入) 八、二三一
同 十四年	六二、二四九	三一、一九一	(入) 一三二
同 十五年	六七、一六七	二九、四四六	(出) 八、二七五
同 十六年	六四、七一二	二八、四四四	(出) 七、八二二

9) 松方正義、紙幣整理始末附録に據る。

同 十七年	六三、五四三	二九、六七二	三三、八七一	(出) 四、一九八
同 十八年	六六、三〇二	二九、三五六	三七、一四六	(出) 七、七八九

二 明治十九年以後の好景氣——『鐵道景氣』

(一) 最初の十年間にその政治的地盤を確立した吾が資本主義は、次の十年代にその經濟的準備を進めて金融網を組織し、兌換制度を確立し、且つ産業自由の政策に轉換した。此の自由政策はそれに續いたデフラチオンによつて挫折せられ、直ちに其の効果を發揮することなくして數年を経過したが、十九年一月以降、新兌換制度の下に不換紙幣の平價引換を開始するに及んで、十四年以來の不景氣は次第に恢復し來り、こゝに吾が資本主義は新しき地盤と準備の上に自由主義の効果を發揮して、吾國最初の平常な好景氣を経験することゝなつた。十九年六月、田口博士はすでに、『商況恢復の端倪に顯はる』¹⁾と題して、『今や商況は既に其の方向を轉じ、幽鬱なる暗夜を脱して漸く將に旭日の曙光を望まんとするの境遇に進みたるを見るは誠に賀すべきなり』²⁾と述べてゐる。

當時米價は十六年以來二十二年に至る七ケ年の低落時代であつたから、之を前のインフラチオン景氣に比すれば、農民の好況はそれ程ではないが、商工階級は安定した通貨制度の上に出た景氣であるだけ、前の好況とは異つた堅實な力強い好況を享樂することが出來た。二十年の中頃には金融の小締りを見せたこともあつたが、大體に於て景氣は十九年以後向上の一路を進み、二十

1) 田口博士、東京經濟雜誌第三百二十一號所載。
鼎軒田口卯吉全集第七卷四〇五頁。
2) 全集同上 四〇五頁。
3) 本庄博士、經濟史考(大正十四年)一八〇——一八八頁。

一、二年に及んで其の絶頂に達し、新設企業は空前の盛況を示し、事業熱の流行は多數の泡沫會社をさへ濫設せしむるに至つた。『明治財政史』は此の好況を報告して次の如く述べてゐる。

『明治十九年に遡るでは、紙幣正貨の交換を實施したるため、通貨の性質安定し、鐵道其他實業を企圖するもの民間に興り、商況回復の機漸く市場に萌芽せり。然れども同年夏期惡疫の流行甚しく、爲めに大に一般の氣勢を沮喪し、充分の復活を見るに至らずして止みぬ。而して此、積年沈淪せる經濟界は、翌明治二十年に至りて愈々活動の端を現はし、多數の國立銀行は漸く其元氣を回復して、續々増資の計畫を爲したり。

『明治二十一年及び同二十二年に於ては、新設企業は空前の盛況を呈し、一時事業熱の流行を致し、殊に鐵道の建設、機械の買入、工場建設等莫大の資金を要し、運轉資本の需要亦甚だ夥しきを以て、銀行事務は繁劇を極め、國立銀行中此機に乗じて増資を爲すもの多く、孰れも其發賣差益を得て運用資金を増殖し、頗る良好の結果を收めたり。其他私立銀行の新設増資殆んど枚擧に遡あらず』と。

今この好況時代に於ける銀行・會社の資本金並びに手形交換高の増加を示せば左の如し。

年次	銀行資本(千圓)			會社資本(千圓)			手形交換高(千圓)		
	國立銀行	私立銀行	商業會社	工業會社	運輸會社	大阪交換所	國立銀行	私立銀行	商業會社
明治十九年	四四、四一六	一七、九五九	三五、九〇三	一四、七二五	一一、〇七九	二二、〇七四	四四、四一六	一七、九五九	三五、九〇三
同二十年	四五、八三九	一八、八九六	三七、四七四	二〇、〇一〇	一二、一二九	二四、〇七一	四五、八三九	一八、八九六	三七、四七四
同二十一年	四六、八七八	一六、七六二	三九、八七〇	三九、〇三一	三一、八七〇	二八、八九八	四六、八七八	一六、七六二	三九、八七〇
同二十二年	四七、六八一	一七、四七二	六一、七一九	七〇、一九九	四五、三九〇	三四、一八七	四七、六八一	一七、四七二	六一、七一九
同二十三年	四八、六四五	一八、九七七	六一、八八一	七七、五二九	四七、三九〇	三七、二四七	四八、六四五	一八、九七七	六一、八八一

(二) 吾々は此の好景氣を『鐵道景氣』として特徴づけ得ると思ふ。固より此の好況時代に勃興し

4) 明治財政史、第十三卷四七二—四七三頁。
 5) 東洋經濟新報社編、明治大正國勢總覽四頁、七頁(拂込資本額)。
 6) 東京經濟雜誌、創刊四十周年記念號附錄六八頁(公積資本額)。
 7) 東京經濟雜誌前掲附錄六〇頁。

たるものは、前表に示すが如く各種の企業に亘り、また鐵道の發達は獨り此の好況期に限られたものではないけれども、なほ此の景氣の進行に於て最も顯著な役割を演じ、最も急速な發展を遂げたものは、鐵道事業であつた。前表に於て銀行・商業會社の發展に比し、運輸會社（水陸）は工業會社と共に特に著しい資本増加を示してゐるが、左表はまた同様の實證を他の方面から提供するものであらう。

全國會社創立調一覽表（千圓）⁸⁾

	明治二十年		明治二十一年		明治二十二年		計
	資本金	同年拂込高	資本金	同年拂込高	資本金	同年拂込高	
鐵道	三九、二〇五	一、七二五	七五〇	一五〇	一六、五五〇	一、一三二	五六、九〇五
銀行及銀行類似會社	八、四六五	三、九九五	三、九六三	二、三四八	四、二四〇	二、〇九一	一六、六六八
鐵業	二五〇	二二二	一、七〇五	四五三	三	三	一、九五八
製造	一九、五一一	四、四七八	八、三一二	二、五五三	一八、一一一	四、八一五	四五、九三四
農業	六二三	六二	五一四	一五八	一、三三〇	一九七	二、四六七
水産	一、〇三二	三〇	一、九四三	五四〇	五五	四二	三、〇三〇
運輸	二、二七五	九三九	一、八五五	六八五	六、二五三	一、七一五	一〇、三八三
賣買	七、〇四一	二、六六二	三、六八二	一、〇六三	五、七九五	一、七八〇	一六、五一八
勞務	一一八	三八	四	三	八三	三五	二〇五
其他	一、六五四	二〇七	一、四七六	四三七	七八二	五〇五	三、九一二
計	五九、六七八	一四、四四二	二四、二〇九	八、三九四	五三、二〇五	一二、三二〇	一三七、〇九二
							三五、五六

明治十四年の自由政策への轉換は、先づ第一に鐵道事業を民間に開放することとなり、東京青

8) 松方正義、紙幣整理始末二五八—二五九頁に據る。

森間の日本鐵道會社は十四年八月設立を認可されて、私立鐵道の先鞭をつけた。然るに此の會社は多額の政府補助を受け、且つ極めて有利な經營を想はしむるものがあつたから、鐵道熱は之を動機として急速に勃興すべきであつたが、恰も此頃から起つたデフラチオンに壓迫せられ、漸く十九年以後の好況に遭遇して一時に勃發したものである。それ故に鐵道事業は、自由政策と此の好況との結果として勃興した新興企業を代表するものであつた。

之を株式取引所に就て見るも、明治十九年前後を以つて『公債時代を離れて、株式時代に入つた』のであるが、最初の大阪商船熱を過ぎて、二十一、二年に至つては、鐵道株は取引所の花形となり、大阪では山陽鐵道株・九州鐵道株が花形株として最も眼ざましき活躍をなしたのである。今この好景氣を中心に創設された鐵道會社を見れば、次の如き多數に上る。

明治十四年	日本鐵道
同 十七年	阪堺鐵道
同 十九年	伊豫鐵道
同 二十年	兩毛鐵道、水戸鐵道

明治二十一年	山陽、九州、讚岐、 大阪、關西、甲武鐵道
同 二十二年	甲信、日本、北海道、 炭礦、總武鐵道
同 二十三年	豊州、筑豊、 參宮鐵道

官設鐵道も亦この期間に著しく延長せられ、二十二年には東海道全線を開通するに至つた。

いま全國の鐵道延長を見る時は、左表の如く明治十八年三百五十哩に過ぎなかつたものが、此の好況を経過した後の二十三年には、千五百哩に近づかんとしてゐる。此の如き短期間にかゝる急速なテンポを示した發展は、他の時期に於ては見るこゝの出来ないものである。

全國鐵道延長噸數

明治十五年	一七三	明治二十一年	九一三
同 十六年	二四五	同 二十二年	一一三九
同 十七年	二六二	同 二十三年	一四四三
同 十八年	三五五	同 二十四年	一七一七
同 十九年	四三三	同 二十五年	一八六九
同 二十年	五三五		

言ふまでもなく鐵道は國內に於ける經濟交通の根幹であり、資本主義の發展にとつては是亦基礎的な根本條件である。すでに『銀行景氣』によつて金融組織の上に一應の準備を整へた吾が資本主義が、今この好況時代に於て『鐵道景氣』を現出して、經濟交通の設備を整へたことは、極めて興味ある事實であつて、これによつて吾が資本主義が一步步と其の成立に近づきつゝあることが實證される。

三 明治二十三年の恐慌——其後の景氣恢復

(一) 明治二十三年の恐慌は、吾が資本主義の經驗した最初の近世的恐慌であつた。それは十九年以來の好景氣の行詰つた結果として、不可避的に惹き起されたものであるが、併し此の年に至つて相次いで繼起した諸事情、即ち恐慌の勃發を誘導した諸動因をも見逃すことは出来ない。

第一に金融の逼迫は企業熱の進行するに従つて早晚起るべきものではあるが、特に二十二年の

前半には鐵道補充公債・整理公債・海軍公債の合計千百萬圓が矢繼早に募集せられたから、下半年期に入つて俄かに金融逼迫を感じ金利は騰貴した。かくて前年來の企業熱と投機熱とに驅られて資力を顧みず株式を所有したものは、その拂込に當つて金融逼迫に際會し、甚だしき困難に陥らざるを得ない。商工階級はかくて二十三年前半期に入つて窮迫に陥り、破産者相次ぐの慘狀を呈した。

第二に過去七ヶ年の豊作つゞきは二十二年の秋に至つて稀有の凶作となり、米價暴騰して都市ならびに地方細民の窮迫となり、百姓一揆をさへ勃發せしむるに至つた。¹⁰⁾此の米價騰貴が更に金融を逼迫せしめたこと言ふ迄もない。

第三に比年下落の傾向にあつた銀價は、米國市場の影響を受けて俄かに騰貴し、當時銀貨國たりし吾國の爲替を激動して、凶作に伴ふ米の輸入と相俟つて、著しく輸入を増加せしめた。

第四に此年(一八九〇年)に起つた世界的恐慌、殊に米國のそれは直接に吾國に影響して、生絲その他の輸出は一時全く杜絶し、爲替暴騰と相俟つて輸出の著減となつた。かくて明治十五年以來久しく出超を續けて來た外國貿易は、此年初めて巨額の入超を示すこととなり、正貨流出して金融逼迫の勢を強めることとなつた。

『明治財政史』は是等の事情につき述べて言ふ、『明治二十三年は内外幾多の原因重ね來りて我が經濟界を攪亂し、一大恐慌を惹起したるの歲なりとす。即ち内國に於ては、(第一)興業熱の反動より信用を破却したること、(第二)前年の凶作より起りたる米價の暴騰は、頓に資本の需用を

10) 本庄博士、前掲書一八九——一九〇頁。

増加せしこと等其最なるものにして、外國に在りては、銀貨の騰貴爲替相場を變動して、我が貿易を麻痺せしめたることは是れなり……」¹¹⁾と。

今この恐慌の前後に於ける銀行・會社の拂込資本金に就て見るに、左表の如く多くは減少または停頓を示してゐる。就中資本減少は商業會社に於て最も著しく、工業會社之に次ぎ、私立銀行の如きは殆んど其の影響を認め難い。¹²⁾

	銀行資本(千圓)		會社資本(千圓)		
	國立銀行	私立銀行	商業會社	工業會社	運輸會社
明治二十二年	四七、六八一	一七、四七二	六一、七一九	七〇、一九九	四五、三九〇
同二十三年	四八、六四五	一八、九七七	六一、八八一	七七、五二九	四七、三九〇
同二十四年	四八、七〇一	一九、七九七	四九、〇八一	七〇、三九二	四七、九六〇
同二十五年	四八、三二六	二二、八五六	五一、一七一	六九、〇六一	五一、〇三五

(二)此の恐慌に對して日本銀行は、(一)二十二年八月及び九月の二回に金利を引上げて之を警戒し、(二)二十三年三月限外發行によつて兌換券を増發し、(三)金録公債八百萬圓を償還して市場を活し、(四)五月には兌換銀行券條例を改正して第一回の保證準備擴張をなした。蓋し最初の十七年の條例に於ては、たゞ『相當の銀貨準備を置き其の引換準備に充つ可し』と規定せられ、準備額の決定を後日に留保したが、二十一年の條例改正によつて初めて保證準備及び限外發行を認め、七千萬圓を限度として(但し政府紙幣及び銀行紙幣の償却を完了するまでは二千二百萬圓)保證準備の下に發行し得ることとなつたが、更に二十三年の恐慌に際會して一千五百圓を追加擴張し、八千

11) 明治財政史、第十三卷四七三頁。

12) 前掲類似の表と同じ資料に據る。

五百萬圓(現實には三千五百萬圓)となしたのである。(五)最後にこの年五月東西同盟銀行の「大阪會議」の結果として、日本銀行をして日本鐵道會社以下十五種の株券に限り、之を擔保として手形割引を擴張するの途を開いた。謂ゆる見返擔保制の創始これである。

要するに二十三年の恐慌は、上りつめた好景氣の反動として、金融逼迫の過程をとつて發現したものであり、此點に於て近世的恐慌の性質を有する。固より之が勃發を誘いた動因としては、因作及び外來事情等を認めねばならぬが、併しそれにも拘らず此の恐慌は、明治初年、七年及び十七年の恐慌に比較して、著しく其の性質を異にすることは明らかであらう。

(三) 政府及び日本銀行の救濟手段によつて此の恐慌の難局は救はれ、此年後半に入つては稍々安定を見るに至つたが、之に續く不景氣は次第に深刻となり、二十四年は大體に於て不況を免れなかつた。然るに二十五年には銀價暴落による輸出促進あり、金融緩和して公債株券の値上りを來し、二十六年に入つては景氣恢復の兆候著しく、金融はますます緩漫となり、後半には企業の勃興するもの次第に増加するに至つた。

此の如く急速なる景氣の恢復を見た一原因は、當時吾國は銀貨國であり、且つ銀は世界的大勢として此の時代を通じて下落傾向にあつたからである。明治二十年代に於ける吾が國民經濟が、かゝる對外事情に恵まれて、未だ嘗て見たることなき急速な發展を遂げ、有利な事情の下に吾が資本主義を育成し得たことは、注意すべき一事實であらう。蓋し銀價下落時代に於ける銀貨國にあつては、(一)爲替の下落によつて輸出を促進し輸入を抑制するから、貿易は好轉し、(二)物價の騰

貴となつて景氣を刺激するため、企業は一般に勃興するからである。たゞ此の場合に伴ふ爲替の動搖と物價の騰貴とは、幣制に對する輿論を喚起することとなり、且つ金本位制の世界的大勢に刺戟されて、政府は二十六年貨幣制度調査會を設けて金銀本位制の長短を研究せしむることとなり、後の幣制改革を蘊釀することゝなつた。

四 日清戦後の好況と三十年の恐慌——「海運景氣」

(一) 明治二十七年の前年は前年來の景氣恢復を受けて、商工業は一般に活況を呈して來たが、後半に入つて俄かに頓挫した。清國との關係が不安となつたからである。八月遂に開戦を見るに及んで、經濟界は警戒の氣分強く、事業は中止又は繰延せられ、金融界は軍事公債に壓迫せられ、國民の需要は緊縮されて、軍需工業と海運業とを除いては、一般に不況に陥つた。

然るに二十八年四月戦捷を以つて戦局を結ぶに及んで、國民一般に戦捷氣分に酔ふて頻りに國力膨脹を唱へ、政府も亦戦後經營と稱して積極方針をとつたから、二十八年後半には既に株式界の熱狂時代を現出し、一般財界も亦活況を呈して來たが、二十九年に入つては、景氣はますます向上して企業熱は旺盛を極むるに至つた。今この好況に於ける銀行・會社の拂込資本を示せば左の如く増加する。但し國立銀行の資本が二十九年以後著しく減少せるは、營業満期のため私立銀行に轉換せるものあるによる。従つて私立銀行に於ける増加は之に關聯せる増加を含むものである。¹⁾²⁾

1) 大林五十年史、五八一頁。
2) 前掲表と同じ資料に據る。

銀行資本(千圓)

會社資本(千圓)

	國立銀行	私立銀行	商業會社	工業會社	運輸會社
明治二十七年	四八、八一六	三七、四一一	五五、七三三	六二、一五四	七五、〇九〇
同 二十八年	四八、九五二	四九、九六七	五七、一六八	七四、五八五	九四、〇二八
同 二十九年	四四、七六二	八八、九七〇	一九二、七三五	八九、九〇〇	一一三、二一六
同 三十年	一三、六三〇	一四九、二八六	二六〇、二二七	一〇五、三八一	一六四、六八四

然らば何故に戦後の景氣は、此の如く急激に勃興し來つたか？

第一に戦争は約二億の戦費を要したが、其の大部分は増税によらず主として公債によつて調達されたから、直接に國民經濟を壓迫すること少く、且つ戦費の大部分を占むる軍需品費は、輸入品を除いては國內産業を需したから、戦費の大部分は結局に於て國民所得に歸し、國民の購買力は之によつて著しく増加した。且又戦争が國外に行はれたると交戦期間の短かつた(九ヶ月)ために、國富の實質的破壊は少なかつた。たゞ戦時中は金融界の壓迫と緊張せる國民心理のために、右の結果は表面に現れて來ないけれども、戦争終結と共に諸種の壓迫が緩和されると、一時に反撥して急激に景氣を勃發せしむることゝなる。

第二に償金三億六千萬圓の獲得による金融緩漫の期待は、景氣を刺激するに十分であつた。併し乍ら償金の大部分は、實質的には陸海軍の擴張費として不生産的に消耗せられ、且つ其の大部分は輸入品に屬するものであつたから、償金が直接に金融界を需したのは、其の一小部分に過ぎなかつた。たゞ償金の一部は謂ゆる預合法によつて、在外償金を引當てに兌換券を發行し得るの

途を開いたから、それだけは通貨膨脹の結果となり、また他の一部は同じくロンドンに保存されて爲替資金として輸入を決済したから、それだけは正貨の流出を防いで通貨收縮を防ぎ得たに過ぎない。

第三に政府ならびに日銀當局の進取的態度は、また戦後景氣を煽動すること少くなかつた。積極的な川田日銀總裁は、二十八年七月急に金利を引下げ、また屢々其の開放的進取の方針を公言して、企業の勃興を煽揚するに努めた。例へば此の金利引下げに先だつ二週間前、日銀營業局長山本達雄氏は總裁の意を承け、銀行家の會合に臨んで其の營業方針を述べて居る。

「……平和克復の今日に當りて我實業者は是非とも秩序的進取の方針を取らざるべからず。而して吾々銀行者は此際貸出を緩むるも損失の憂甚だしく、又今日の如き高き金利にては投機的事業流行の氣運も甚だ少しとすれば、吾々は社會の爲め又我營業のために進取主義を以て適當なる商賈に融通を與ふる今日正當適宜の策なりと信ず。諸君にして果して此針路を取らるゝに於ては、漸次金融も回滿となり、利子も今日の如く高からずして、平常の利率に復し、事業振興の時節道々到來すべしと思ふなり。……」

『之を要するに我日本銀行は平和克復の今日となり、現時の如き商賈社會の有様なる以上は、一般の必要に應じて進んで貸出をなし、大に商賈上の回滿を圖る決心にして……日本銀行が漸次貸出を緩め、進取の方針を探るといふ點に付ては、小生が責任を負ふて茲に諸君に斷言する所なり』と。

(二) 日清戦後の好況は此の如く急激に勃興して、二十八年後半から二十九年前半に亘り約一年を経過したが、その反動も亦急激に襲來して、二十九年の後半には既に逆勢に陥りつゝあつた。加ふるに東北地方の海嘯、關西地方の洪水ありて各地に凶作多く、金融逼迫して事業界の壓迫甚

3) 瀧澤直七著、稿本日本金融史論四三二頁に據る。

だしく、遂に年末より翌三十年に亘つて恐慌状態を現出するに至つた。恐慌は先づ大阪の糸商大
門利兵衛の不渡手形に發し、同氏の關係したる大阪同盟貯蓄銀行、島之内銀行、琴平銀行は急激
なる取付に遭ふて支拂を停止するに至り、大阪同盟諸銀行の警戒嚴重となり、融通の途を絶たれ
し銀行は俄かに困難に陥つた。當時預金の取付に遭遇したる銀行は、第四十七、第七十九の國立
銀行、大阪明治銀行、大阪銀行、天滿銀行、天王寺銀行、木津銀行、玉造銀行、逸見銀行、近江
銀行等の多數に上り、遂に日本銀行の出動によつて危急を脱することが出来た。

同時に東京に於ても木綿問屋小杉伊兵衛、本多銀次郎その他の不渡事件あり、之に關聯して同
業者數十人の危急を示げ、金融界の警戒嚴重となりて窮迫は一般化するに至つた。此の時關東第
一流の織物仲買商として全國に亘つて手廣く取引せる桐生の佐羽吉右衛門なるもの、亦窮狀を曝
露し特に關東一帶の機業地方に激動を與へたのであつた。⁴⁾

此の恐慌の動因となつたものは、主として外國貿易の逆勢にあつた。一方に戦後の景氣は輸入
を激増せしむると共に、他方に戦敗後の支那に於ける財政經濟の紛亂の結果として、對支輸出は
甚しく不振に陥つたから、二十九年の前半以後巨額の入超を見るに至つた。殊に綿絲布の對支輸
出が杜絶した結果、綿業關係者の窮狀最も甚しく、遂に恐慌の導火線となつたのである。

たゞ此の恐慌の特異な現象として注意すべきは、一般物價の暴落を伴はなかつたことであら
う。その原因は恐らく銀價下落の大勢が底流をなせる上に、償金に伴ふ兌換券の増發を見たから
であらう。それ故に此の恐慌は、投機家・虛業家・金融業者に對する打撃ほどには、綿業關係者を

4) 龍澤直七著、前掲書四八九頁以下參照。

除き一般商工界に對する打撃は大なるものがなかつた様である。

銀行集中の傾向が此の恐慌の結果として其の萌芽を現したことも注意すべきである。この恐慌に於て既に一般預金は、小銀行を去りて大銀行に移り、三井三菱等の大銀行は却つて預金を増加した。政府が初めて『銀行合併法』を制定して、銀行集中助成の政策に出たのも亦この恐慌からであつた。

(三) 最後に日清戦後の好況は、何を以つて其の特徴とすることが出来るか？ 既に述べ來れる如く、この好況も亦各種の企業に亘つたものであり、銀行の増設、鐵道の計畫、紡績事業の勃興等何れも旺盛であつたけれども、最も著しい活況を呈し且つ實質ある發展の跡をこゝめたものとしては、海運業を第一に推さねばならぬ。すでに開戦と共に最先に活況を呈したのは船舶業であつた。郵船會社は先づ二萬二千噸を購入して御用船に供し、次で陸軍大臣は二萬六千噸を、海軍大臣は一萬八千噸を郵船會社の名義を以て購入し、約十萬噸に近き船舶を陸海軍の御用船として運用した。

政府は二十九年三月航海獎勵法及び造船獎勵法を制定して、海運業を保護獎勵することとし、郵船會社の歐洲航路は此時初めて開かれた。次で八月には米國航路、十月には濠洲航路を開き、また支那航路の開始をも決定した。大阪商船會社も亦二十九年五月には臺灣航路を開き、三十一年には南清航路を、次で朝鮮航路を開く等、吾國の外國航路は殆んどすべて此の好況時代を中心として創設せられたものである。

5) 瀧澤直七著、前掲書四九三頁。
6) 東京經濟雜誌、前掲附録六七頁。

東洋汽船會社も亦二十九年に創立せられ、同時に横濱には大東汽船會社の計畫あり（後に前者と合併す）東洋汽船株の如きは一錢の拂込なき権利株が十五圓もするといふ盛況を呈した。いま明治二十年代に於ける汽船噸數の増加を左に示して、之を鐵道哩數の延長と比較する時は、二十三年に至る『鐵道景氣』と、日清戦後の『海運景氣』とを實證し得るであらう。

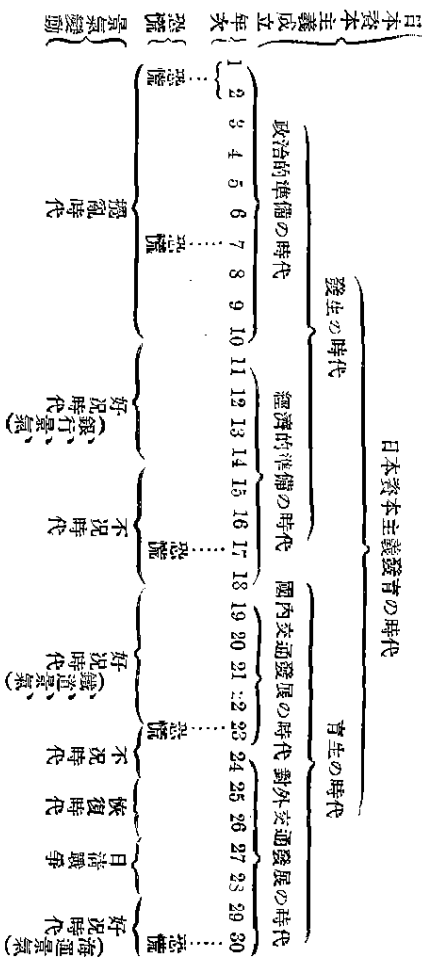
年	次	汽船噸數	増加率	鐵道哩數	増加率
明治二十年		七三,三三三		五五五	
同二十一年		八〇,〇六六	一三・一	九三三	一七・七
同二十二年		八八,八八六	一〇・九	一,一三九	二四・七
同二十三年		九八,八三三	一〇・五	一,四四三	二七・七
同二十四年		一〇五,五九六	一〇・九	一,七七一	二九・〇
同二十五年		一〇七,〇〇〇	一・四	一,八六三	一・九
明治二十六年		一〇七,〇〇〇	〇・〇	一,〇七七	一・九
同二十七年		一〇九,三四四	二・二	一,五三七	二一・八
同二十八年		一一三,三三三	三・五	一,五五九	二・七
同二十九年		一二〇,八〇一	六・六	一,〇六九	二・四
同三十年		一四五,六四四	一八・八	一,六六八	二九・六

すでに『銀行景氣』と『鐵道景氣』とを経験した吾が資本主義は、日清戦争を機會に『海運景氣』を現出して、こゝに海運業の著しき發展をなしたことは、極めて意義あることである。資本主義の成立するためには、商品交通に關する基礎的組織網が先づ完成さるゝことを要するが、金融網と鐵道網とを或程度に準備した後、更に航路網を略々完成せしめたことは、即ち其の基礎的組織網が略々準備されて、資本主義が將に成立に近づきつゝあることを示すものであらう。のみならず外國航路の發展は、吾が資本主義と歐米資本主義との更に緊密な關聯を保證するものであり、是と前後して成立した三十年の金本位制の確立と相俟つて、吾國が初めて世界資本主義に合流する

に至つたことを意味する。それ故に此の時期を以て吾が資本主義は略々其の育成を完了して、世界並みの資本主義を成立せしめたものと見ることが出来る。日清戦争及び之に續く好況が吾が資本主義に齎した影響は極めて重大であり、此の好況を終結した明治三十年の恐慌を以て吾が資本主義の前期を劃し、之を其の發生並びに成立の時代となすは、理由あること、思はれる。

五 結 言

以上前論及び本論に於て述ぶる所を表示すれば次の如くなる。



明治初年より西南役に至る最初の十年間は、資本主義の政治的地盤を確立した時代であり、經

濟的には一般に擾亂停頓の時代であつた。就中政治的騷亂の最も甚だしかつた明治初年及び七年は、同時に經濟的擾亂の最も甚だしかつた年であり、遂に恐慌を見るに至つた。

明治十年代は既に確立した政治的地盤の上に資本主義を實質的に準備した時代であり、景氣變動は先づインフレーションの形をとつて此の時代に始めて現はれて來た。最初のインフレーション景氣は、政治的勢力の確立と不可離の關係にある不換紙幣の増發によつて惹き起され、國立銀行及び私立銀行の眼ざましい増設を中心として、謂ゆる『銀行景氣』を現出し、資本主義の基本的組織たる金融網を準備した。不換紙幣の整理に伴ふ十四年以後のデフレーションに於て、中央銀行を設立して此の金融網を完成し、兌換制度を確立して通貨の安定を保證したから、資本交通に關する組織、即ち通貨・信用・金融に關する基本的組織は、此の時代を以つて略々完成さるゝに至つた。

明治二十年代は大體に於て商品交通に關する組織を完成した時代と見ることが出来る。此時代に現れた二つの好景氣は、この點につき重要な役割を演じた。即ち二十三年の恐慌に終る第一の好況——『鐵道景氣』は、國內交通の發展に重要な貢獻をなし、三十年の恐慌に終る日清戰後の好況——『海運景氣』は、外國航路網を略々完成することによつて、同時に行はれた金本位制の確立と相俟つて、世界資本主義への合流を強むることゝなつた。

かくの如くして吾が資本主義は、その發育の時代に經驗した三つの好況時代——銀行景氣・鐵道景氣・海運景氣——に於て、資本交通及び商品交通に關する組織網を順次に完成し、同時に世界資本主義との合流を緊密にして、茲に初めて世界並みの資本主義を成立せしめたものと見るこ

どが出来る。

此の時代に經驗した恐慌は、前表に見らるゝ如く、明治初年、七年、十七年、二十三年及び三十年の五回に及び、長きは十年、短きは六年の間隔をおいて發現してゐる。併し乍ら既に述べたる如く、是等は等しく恐慌と稱するも、著しく其の性質を異にするものである。明治初年及び七年の恐慌は、騒亂及び凶作を主因とするものであり、多くの點に於て未だ封建的性質を脱し得ざるものであるが、二十三年及び三十年の恐慌は、何れも好景氣の反動として發現し、多くの點に於て近世的性質を有するものであつた。このことは即ち吾が國民經濟が此の間に於て漸次資本主義的に發展しつゝあることを傍證するものに外ならぬ。

之を要するに、日本資本主義の發展史は、景氣變動を度外しては、全く現實を離れた抽象となつて了ふ。また景氣變動史は其國の國民經濟の發展に即するでなければ、その現實を理解することは困難である。此の小論は固より不十分なものではあるが、此の試みに對する多少の參考ともなり得れば、筆者の望みはそれで足りるであらう。(完)